



TITLE:

聖書之天文學(三)

AUTHOR(S):

モーンダー, E. W.

---

CITATION:

モーンダー, E. W.. 聖書之天文學(三). 天界 1924, 4(40): 153-159

ISSUE DATE:

1924-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160059>

RIGHT:

# 聖書之天文學

グリニチ天文臺前太陽部總理 E・W・モーンダー

## 第三章 淵

バビロニアの創造に關する神話—チャマツト即ち混沌中にある龍—メロエダクに征服さる—スカンディナビア人の神話に於ける類似—創世記にある物語とは類似する所なし—ヘブル語テホームの意味—バビロニア創造神話の時代

創世記の第二節に『而して地は定形なく(トーフ)且つ曠空わだかまくして(ボーフ)(即ち荒廢し且つ空虚な)黑暗淵やみの表面にありき』と記さる。此處に淵と譯されたテホーム(Tehom)なる語はヘブル人がその創造物語を、彼等がバビロンに捕囚たりし時に、其征服者達から聞いた物語より誘導せりこの説を支持する爲めに用ゐられて來た。若しも此の説にして眞實なるを證明さるゝならば、<sup>イメレシジョン</sup>靈 感を受けた記者等の自然の事物に對する態度に關する主題に非常に重要な關係を有する事なる故にその吟味の爲めに少し許りの紙面を費さなければならぬ。

創世記第一章の目的は我等に次の事實を告げるにある——『元始に神天と地とを創造たまへり。』

これから我等は宇宙とそれを造りなす凡ての部分—エネルギーの凡ての異なる形式、物質の凡ての異なる形態—は彼等自ら神々でもなく、又それらの具體化せるものでも、又表現せるものでもなく、又相争ふ神々の工わざでもない事を學ぶのである。これから我等は此の宇宙なるものは自存せるものでもなく、或は又(汎神論者の考へる如く)一つの漠然たる非人格的な無意識的な而も萬物に透徹する勢力の表現でもない事を學ぶのである。それは自ら出來たものではなかつた、それは永遠の昔から存在しなかつた。それは神ではない、何となれば神がそれを創造し給ふたからである。

然しながら其の起源の問題はヘブル人以外多くの國民の心意を練磨せしめた、而してヘブル人の近隣であり、且つ同じ大きなセミチック人種から分れた國民により達せられた解釋には特別な趣味が附隨してゐる。

此の事柄の性質上、世界の起源の記事は經驗から割り出す事を得ず、又科學的實驗の結果でもあり得ない。彼等は歴史の條項を形作り得ないし、又傳統から生ずる事も出來ない。世には彼等の爲めに唯二つの源があり得る、一つは神の啓示

であり、他は人間の工夫之れである。

バビロニア人の間に流通した記事がシリアの著述家ダマスシウス(Damascius)に由つて我等に保存されて來たが、彼は次の如く記してゐる。――

『然しバビロニア人は他の野蠻人と同じく、宇宙の一法則については沈黙の中に看過し、而して彼等はタブゼ(Tabze)ミアバソン(Apasen)なる二つを設けて、アバソンをタブゼの夫たらしめ、彼女を「神々の母」にして命名してゐる。而して是等から唯一人の子ムミス(Mimis)が出るが、私はそれが二箇の法則から生ずる知覺し得べき世界に外ならないと考へるのである。彼等から又他の子孫ラクヘ(Lakhe)ミラクホス(Lakhos)が誘導され、且つ三度キサレ(Kissare)ミアソロス(Assolos)が出で、彼等から最後の三人アノス(Anos)イリノス及びアナス(Aos)が出る。而してアナスミラクヘからベロス(Belos)と稱せられた子が生れたが、傳ふる所に由れば、彼が世界の構造者なのである』(過去の記録第一卷一二四頁)

ダマスシウスに由つて右の如く抄記された實話はジョージ・スミス(George Smith)氏に由つて、長い敘事詩の形で數枚の牌に記されたものが發見せられ、クレーンジーク即ち

ニネベから持ち歸られたが、彼はそれを一八七五年に「創世記のカルデア人の記事」なる著書中に公表したのである。其等の牌は一つにして完全なものは無く、或るものは唯一小部分が残つて居るに過ぎなかつた。然しながら其の詩の外の寫が他の地方で發見されて、重大な部分を満足に結び合せ得る事が知れた爲めに、其の詩の一般的目的について可なり觀念が我等に傳へられたのである。

それは一人格者チアムツ(Tiamat)――ダマスシウスの記事中のタブゼで、彼は萬物の原始の母として認められてゐる――の紹介を以つて始まつてゐる。

『高きに諸の天の未だ名付けられざりし時、下の地にては一つの名も冠せられざりき、

原始の大洋は彼等の生産者なりき、

ムンム・チアムツは彼等凡てを生みし者なりき。

その水は自ら結合せし一つにして、且つ

原野は外線を畫されず、沼澤は見られざりき。

神々の一人も未だ出でざりし時に、

彼等は名無く、運命(も決定されざりき)

彼處に神々(彼等の凡て)が生じたりき。

(1・G・ピンチエズ著、アツシリヤ及びバビロニアの歴史的記録に照した舊約聖書十六頁)

次に神々の系圖があり、其の物語の切目の後に、チアマツト (Timat) 即ちチアムツ (Tiamut) が、戦争の爲めに準備せるものとして表はされてゐる。即ち『萬物を創造せし彼女が：：巨大な蛇を作つた』彼女は神々の一人なるキング (King) を彼女の夫として又、彼の勢力の將として選んだ、そして彼に運命の牌を手渡した。

第二の牌はアンサル (Ansar) 神がチアマツトの威嚇的態度を怒つて彼の子アヌー (Anu) を彼女に御機嫌をこる様に物語り、彼女の怒を和めさせようと思はした事を示めてゐる。

然しながら初めにアヌー次に他の一人の神が無益に争つて歸つた、そしてエア (Ea) の子なるメローダツク (Merodach) が神々の中の選手となる様に請はれた。メローダツクは喜んで之れに應じたが、自分の爲めに善い條件を作つた。神々は能ふ限りの方法を以つて彼に彼等の力を委託し、もつて彼を援助すべきであり、且つ彼を凡ての中で第一等の且つ主たる者と認むべきであつた。彼等の窮地にあつた神々は喜んだ。彼等はメローダツクを饗應したが、葡萄酒でよいのまわつた時に、彼等は彼に、不思議な力を賦與し、そして彼に挨拶した――

『メローダツクよ、汝は我等のための復讐者たる者なり、全宇宙(に亘り)我等は汝に王國を與へたり。』

(前出書一六頁)

最初彼の恐るべき敵の様子はメローダツクをすら逡巡せしめた、然し勇氣を鼓して彼は彼女を襲撃し、彼女を彼の網の中に捕へ、惡風を彼女の開いた口に強いて吹かしめ――

『彼は惡風を彼女の口に入らしめて閉づるを得ざらしめき。

其の風の暴力は彼女の胃袋を苦しめたり、而して

彼女の心臓は疲れ果て、彼女の口は歪みたり。

彼は棍棒を振り果て、彼は彼女の胃袋を破砕しぬ。

彼は彼女の腸を切り出せり、彼は(彼女の)心臓を壓せしめたり、

彼は彼女を捕縛し、彼女の生命を終らしめき。

彼は彼女の屍を投げたり、彼はその上に立ちたりき。』

(過去の記録第一卷一四〇頁)

戰鬪は終りを告げ、敵は殺された、メローダツクは其の屍を如何に始末しようかと思案した。

『彼は彼の心を強め、彼は賢い計畫を立て、

而して彼の計畫に基き魚の如く彼女の皮を剥げり。』

(前掲書一四二頁)

彼はチアマツトの屍の半分から地を形成し、他の半分から諸の天を形作り作つた。それから彼は進んで諸の天と地を彼等各々の装具を以つてよそはつた。此の工の詳細は明かに此の續きの第五、第六及び第七の牌を占めて居る。

普通の事情の下では前述の如き古傳は大して世目を惹かなかつたであらう。それはズール人又はフィジー島人の神話の如く、野蠻な無智なものである。正確に言へば、それは全く創造神話ではない。チアマツミ彼女の蛇の群の神々とはメローダツクが彼の工を創めた以前に存在して居た。そしてその神の成就する凡ては世界の改造に外ならない。此の改造の方法は他の未開國民の創造神話に優れる何等特長を有して居ない。我等自らのスカンディナヴィア人の先祖も同様な神話を有して居た。その背景はメローダツクミチアマツトの奇怪な戰爭に確かに劣つては居ない。エツダ (Eda) ミ云ふ散文に由れば、最初の人ブール (Burr) はボール (Boll) の父で、後者は順にオデイン (Odin) ミ彼の兄弟ヴイリ (Vili) ミヴエ (Ve) ミの父であつた。是等のボールの子達がイミル (Ymir) ミ云ふ老ひた霜巨人を殺した。

『彼等はイミルの體をギンメンガガブ (Ginnungagap) の中央迄引いて行つた、そしてその體から地を形成した。イミルの血から彼等は海ミ水ミを作つた、彼の皮から陸を、彼の骨から山を、而して彼の齒ミ口の骨ミ破碎された骨の少し許りの片を一緒にして石ミ小石ミを造るに用ゐた。』

バビロニアミスカンディナヴィヤミの神話の間に各々の中心的且つ本質的な特長に於いて、即ち世界が神々によつて一の巨大な原始的怪物の骸骨の片から建造されたものミ想像されて居る筋途に於いて著しい相似のある事が理解されよう。而も此の二つの間に何か直接的源の關係があるか、バビロニア人が彼等の傳説をスカンディナヴィア人に教えたか又はそれを彼等から學んだか切論せられては居ない。

普通の事情の下では何人にも創世記第一章の唯一神物語を是等の異教神話ミそれ等には不思議な野蠻なる詳細が群つて居るために一から抽出しようミ試みる様な事は殆ど起らないであらう。然しながらアツシリヤの創造の牌を光明に齎したジョージ・スミス氏が又大洪水のバビロニア記録を光明に導くに至つた。その記録は創世記第六章から九章に至る物語ミ一致する多くの特長を有して居た。此の二つの洪水物語の間の實際的相似は二箇の創造物語の間にも相似のあるが如く想像せしめるに至つた。アツシリヤ學研究者の其の後の解釋のあるものの中には、それは巧みに表はされた爲めにバビロニアの傳説中に創世記に於ける物語ミ何等かの相似のあるところか、此の二箇の記録は全然相違する。例へば T. G. ピンチエズ氏はバビロニアの記録中には次の如きものがあるミ

指摘して居る。

『諸の天ミ地ミの創造に對して何一つ直接的の記事なし。』

『創世記に於いて見出されるが如き、被造物を群ミ級ミに組織的に分類せるものなし。』

『創造の諸日に關する言及なし。』

『事物の存在に對する第一の且つ唯一の原因ミして、神性の題現せる事なし。』

(アツシリヤ及びバビロニアの歴史的記錄に照らされた舊約聖書四九頁)

事實、バビロニア記錄中には『諸天ミ地ミは初めから渾沌たる形に於いてこは云へ既に存在せるものミして表はされてゐる。』

然も聖書の創造物語ミバビロニアのそれとの間にあるこ云ふ純然たる想像的の相似の上に『創世記の緒言的の諸章がセミチック人種の多數に共通な神話のヘブル譯を我等に供する』ミの傳説が基因して來た。而して其傳説は尙ほも一層發展せしめられて來た。遂には教授フリードリッヒ・デリツチ (Prof. Friedrich Delitzsch) の如き名望ある記者が創世記物語はバビロニア人から借り來たものだ、よし『創世記第一章を編纂した祭司的學者が此の創造物語の凡ての出來る限りの神話

的特長を除去する事に務めた』けれどもこ主張するに至つた。(Babel and Bible ショーンズ譯三六、三七頁)

若しヘブル人の祭司がバビロニア神話から借り來つたことすれば、彼が借り來つたのは果して何であるのか？海ミ陸、日ミ月、樹ミ動物、鳥ミ獸類ミ魚ミの存在では無い。何ミなれば確にヘブル人もそれを學ぶためバビロンへ移される何等の必要もなく、自らはそれを充分知つて居たミ確かに認むべきである。何時、又何處で、何人が其記事を書くにしても『創造の記事を書くに當つては何が創造された事物であるかに付いての記述は必然に挿入されねばならない。』(アツシリヤ及びバビロニアの歴史的記錄に照した舊約聖書 四八頁)

然らば、此の二つの記事の中に他に共通なものは何であるか？チアマツト (Tiamat) は淵の龍なるバビロニア的宇宙の母に與えられた名である、而して創世記に於いては『黑暗淵 (Tehom) の表面にありき』と記されてゐる。

此處に、而して此處のみに、ありさうな關係の點が存する。然し若しそれが一關係に對する證據であるならば、一體それは如何なる種類の關係を含んで居るのであるか？それはバビロニア人が彼の未開的神話をヘブル人の物語の上に基るせしめた事を意味する。此處には其の關係を解釋するに他の可能

な途はない、——若しも關係が存在するごすれば。

言語學上此のヘブル語は『大浪』、『暴風雨に翻弄せられた水』を意味する如く見える、——『汝の瀑の轟響に應へて淵は淵に對つて叫べり。』我等の『淵』(deep)なる語は靜寂の觀念を我等に與へ易い——英國には『靜かな川は深く流れる』この諺がある、それ故に或る場合にはテホーム(Tehom)は聖書中には確かに、淺い水に用ゐられてゐる。例へば紅海に於いてイスラエル人が渡つた水の如きはそれである。——

『彼はバロの戰車とその軍勢を海に投げすて給へり、バロの勝れたる軍長等は紅海に沈めり。大水(dephim)かれらを淹へり。』(出埃及記第十五章四、五節)

他の諸節に於いて我等の欽定譯(英、日共に)に使用された深淵(deep 又は depths)なる語は正當な意味を示めして居る。

然し、深い水又は騒はしい水は共に自然的事柄である。我等は聖書に於いてテホームなる語は絶えず完全に事實的狀態の下に使用されてゐるのを見る、其處では擬人法や神話が企てられる様な可能性は全然存在しないのである。之れに反して、バビロニヤの水の龍なるチアマットは神話的擬人法であ

る。さて自然的事物は最初に來なければならぬ。或る國民が完全に普通の自然的事物に關する其智識を他國民の神話的擬人法の一を神話を除き去る(Ceuthologize)することによつて獲得したご云ふ例は嘗てない。イスラエル人は彼等の子孫が數百年後に讀んだ水中の龍のバビロニヤ的物語の何れからもテホーム、紅海の浪立つ水、彼等の目前にエチプト人を轉ばしめた淵については學んだのでは無かつた。

尙更に、バビロニヤの創造の記録は比較の後世のものに屬する。ヘブルの記録は疑ひもなく比較的古代に屬する。西紀前七百年の時代頃に建てられたセナケリブミアツシユールバルの宮殿の廢趾なるクエインジユーク丘から發掘されたものによれば實際の楔形文學の牌はその時代のものご云ふ許りでない。教授セース(Prof. Sees)の指摘せし如く、其詩自體はその中でメロダックに與へられた特異な卓越により、後代の作である事を示めてゐる。メロダックが最高の神として採用されたのはバビロン史の後期(エレミヤ記五〇の二参照)に屬する。其の詩中の天文學的言及に至つては尙更に明確である、何ごなれば、後に示めさるゝが如く、それ等は西紀前七百年よりも以前に日附する事の出來ない天文學的一發達を指し示めて居るからである。

他面に於いて創世記第一章は非常に古代に於いて構成された、十六節に於ける天體に關する言及は天文學に可能なる最も原始的狀態の印を佩びてゐる。天體は單に大なる光、小さい光及び星である——最後のものは全く挿句として使用されてゐる。それは聖書中になされた或は實際なし得た最も簡單な天體に對する言及である。

バビロニヤ人の中には此のチアマット神話に示めされたよりも高尚な神々自然に對する觀念を懷いた人々はあつたであらう。ヘブル人の中には創世記第一章に傳へられた教に及ばなかつたものも非常に多數あつた事は確かである。然し此一國民はチアマット神話を保存し、他は創世記物語を保有し、各々それ自らの創造物語を神聖なものに數へたこと云ふ事實は依然として存する。我等は唯彼等が尊んだ物によつてのみ此二國民を正しく判斷する事が出来る。かく審判する時には、ヘブル民族は創世記第一章がチアマット神話に優る如くに、智識に於いても信仰に於いてもバビロニヤ人よりも高位に立つて居る。

因に記す、バビロン及びスカンディナヴィヤの天地創造説よりも遙かに優秀なるは我國の開闢説である、曰く

天地陰陽の未だ剖判せざる渾沌たるこゝ雞子の如し、溟

滓にして而して芽を含めり、乃ち清輕なる者磳歷して天に爲るに至て重濁なる者淹滯して地となる、神聖其の中に生るゝ有り、……………松苗著「國史略」

美はしい説は云へ、依然、神聖の出現は天地出現の後に來る、其の希伯來思想との差異如何に甚だしきかを認めざるを得ない次第である。

尙日本の天地開闢説については「宇宙開闢論史」

附錄 松本文學士の所説を參考すべし。

附記一、

瑞典ドクトル、アレニウスの宇宙開闢論史の「猶太人の創世記」「カルデヤの神話」「ヘブリーユ神話」の差を參照し其の誤解なるを知るべし。

附記二、

山本一清氏著「宇宙建築と其居住者」中殊に其二二三頁「天文の用」中に於いて、「今日の基督教にしても、間接に起源を尋ねて見ればバビロンまで行つてしまふ云々」の項にモーリナー氏の所説を對照せられよ。